

独房の半世紀

あなたは、その時間を
想像することができますか？

無実を叫び続けている。
ずっと。

そして、いまも。

約束

名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯

仲代達矢 樹木希林 天野鎮雄 山本太郎 監修・寺島しのぶ

監督・脚本：斎藤潤

製作：山中伸男 音楽：本多康之 音楽プロデューサー：関田千子之 撮影：堀井洋記 照明：角川雄彦 録音：遠藤淳
美術：高宮祐一 記録：柳田麻記子 脚本：山本史郎 芸藝効果：久保田吉規 編集：奥田 要 助監督：井羽直哉 監修：川島康郎 プロデューサー：岡武野龍哉
製作・配給：東宝テレビ放送 配給協力：東映 2012年11月20日（月）16時（日本）

www.yakusoku-nabari.jp



半世紀近く、拘留所に閉じ込められている奥西さんの心境は測りしれません。私がこの状況に追い込まれたらどうなるか、そういう気持ちで演じました。60年俳優をやってきた中で、私にとって念願的な作品です。

仲代達矢

必ずや生き抜いて濡れ衣を晴らしてやる——奥西勝さんのこの強い信念が、仲代達矢さんの肉体を通じて、ぐいぐいと迫ってきます。息子の無実を信じ、燃つてくる日を待ちながら、千紙を書き続ける母タツノさん。樹木希林さんの姿を借りて蘇る、切々たる母の思い、涙がこぼれます。裁判所や検察は、奥西さんの獄中死を待つているのかもしれない。そんな不正義は絶対に許さない。映画を見て、この思いを新たにしました。

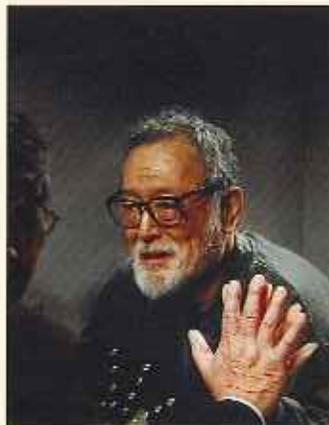
江川紹子

想像してほしい。無実の罪で半世紀も自由を奪われた「人間の苦惱を、息子を信じ続けた「人間」の孤独を、圧倒的な取材力とリアリティ、そして素晴らしい俳優さんたちの演技に魂を揺さぶられ、涙が止まらなかった。冤罪を生んでしまうのも「人間」であり、その所業にたとえようのない恐ろしさを感じてしまう。ぼくは、同じ「人間」として言います。奥西さんを獄中で死なせてはいけません!!

郷田マモラ

日本の刑事司法がこれほどに歪みきつた要因のひとつはメディアにある。ならばメディアには期待できない。僕も含めてそう考えてしまう人たちは、絶対にこの作品を顧るべきだ。メディアはここまでできる。これほどに強い力を持つ。一貫して司法の歪みを問い続ける。阿武野プロデューサーと齊藤監督は、また新しい地平を拓いた。見事だ。正直に告げば嫉妬するけれど、でも認めないわけにはゆかない。彼らは仕事を終えた。次は誰か側が動かなければ。

森達也



何度裏切られても、彼は信じ続ける。裁判所が事実と良心に従って、無実を認めてくれると。

獄中から無実を訴え続けている死刑囚がいます。奥西勝、86歳。昭和36年、三重県名張市の小さな村の懇親会で、ぶどう酒を飲んだ女性5人が死亡しました。「名張毒ぶどう酒事件」です。奥西は一度は犯行を白日しますが、逮捕後、一貫して「無罪」を主張し、検察に無罪を強要されたと主張、1審は無罪。しかし、2審で死刑判決。昭和47年、最高裁で死刑が確定しました。戦後唯一、無罪からの逆転死刑判決です。

事件から51年——際限なく繰り返される再審請求と棄却。その間、奥西は2桁を越える囚人が処刑台に行くのを見送りました。いつ自分に訪れるかわからない処刑に怯えながら。あなたは、その恐怖を、その孤独を、その人生を、想像することが出来ますか？

これは、冤罪ではないか。これは、冤罪を望んでいるのか？

事件発生当初から蓄積した圧倒的な記録と証言を再検証し、本作を作り上げたのは、「平成ジレンマ」死刑弁護人の齊藤潤一（監督）と阿武野勝彦（プロデューサー）。これは、東海テレビ放送の物物ドキュメンタリー「司法シリーズ」を千鳥ける二人が、カメラが入ることが許されない独房の死刑囚を描き出す野心作である。そして、奥西勝を演じるのは日本映画界の至宝、仲代達矢。息子の無実を信じ続ける母、タツノ役に、樹木希林。ナレーションをつとめるのは、山崎のぶ。そう、本作は映画とジャーナリズムが日本の司法に根柢から突きつける異議申し立てなのだ。

www.yakusoku-nabari.jp

7月19日(土) 13:00/15:30/18:00
参加費無料
会場：せんだいメディアテーク7階 スタジオシアター
(仙台市青葉区春日町2-1)
主催：仙台弁護士会 共催：東北弁護士会連合会(予定)
問い合わせ：仙台弁護士会事務局 ☎022-223-1001

